

特別講演 都市づくりの根底にあるもの

西南学院大学教授

九州大学名誉教授

都 留 大 治 郎

I 権力の下に都市はつくれない

城下町に系譜をもつ都市は、日本ではよい都市といわれる。本当にそうだろうか？ ヨーロッパの近代市民社会は「城下」ではなく、「城外」(Pfahl-bürger)に生れたといわれる。この差が日本の企業城下町(企業都市)を生んだのではないか。

II 道元が教えるもの

周知のように道元は真鸞、日蓮とともに、鎌倉期の日本の宗教改革を担った。道元はあるいは、レフォルマティスト、プロパガンディストとしては、後2者に劣るかもしれない。けれども、哲学者、新しい日本語の創造家としては真鸞、日蓮を抜いているとおもわれる。道元の中国留学中の師如浄が彼に与えた言葉がある。「城邑聚落に住することなかれ。国王大臣に近づくことなかれ。ただ深山幽谷に居して一箇半箇を説得し、わが宗をして断絶せしむることなかれ」と。道元はこの教訓を、その居住空間にどう受けとめたか。

III 人間と自然と都市はどういう循環体系をもつか

人間もまた自然の一要素であるが、同時に自然の暴力に抵抗し、それを克服しつつ社会生活を切り拓いた。それでは、人間は自然への勝利者であろうか。そんなことはない。そんな驕りをもつと、ヒト社会は亡びる。農村社会の前期的束縛から離れて、自由な都市社会を人間はつくったが、その都市社会は、しばしば自然へ回帰しようとする。たとえば、トーマス・モアの「ユートピア」、E. ハワードの「明日の田園都市」も、そこに位置づけられる。これらをパン種としつつ、大ロンドン計画のニュータウンも生れた。

IV ニュータウン計画から都心部再開発へ

ニュータウン建設(日本のニュータウンという名をもつベットタウンは論外だが)が、一時期、都市問題解決の有効な手法であったことは事実である。けれどもこの手法はすでに限界をついている。よりコンパクトな都市づくり、都心部再開発に力点を移さねばならない。

日本民族は、「森の人」である。照葉樹林文化である。その思想も文化、宗教(仏教)もそこから生れた。砂漠に生れた西欧のキリスト教、イスラム教の宗教、思想とは明らかにちがう。日本人はミクロ分析には得意だが、マクロ観察に弱いのもここから来よう。

これからの都市づくりは、この長短をあい補いつつ、新しい地平の上に切りひらかねばならない。